

鈴木有郷牧師説教

10/2/7「福音のエッセンスは聖餐式」 ルカ14:15-24

今日は聖餐式の日曜日です。

聖書を読むと、主イエスはその宣教において、一貫して食事を大切にされたことがよく分かります。主イエスにとって食事を共にすることは、神の愛を象徴するのに最も相応しい行為でした。

今朝読んで頂いた「ディナー・パーティーのたとえ」は、この主イエスの考えを最も的確に表現しています。

ある富豪がディナー・パーティーを催します。ところが、招いた人達はいろいろな口実を作ってパーティーへの出席を断ります。そこでその富豪は、召使いを大通りに送り、そこにいる人すべてを食卓に招くように命じます。

そのディナー・パーティーの場面を想像してみましょう。通りにいる人々を誰彼構わず連れて来るわけですから、男性が女性の隣に座り、パリサイ派の人が収税人と、学者が罪の女と、貴族の若者が皮膚病の女と、ユダヤ人がサマリア人と隣り合わせに座って食を分かち合っているのです。

これは当時のユダヤ人にとって、それこそ想像もできない光景だった筈です。当時のユダヤ人社会の差別の構造をそれは根底からひっくり返す大事件だった筈です。

しかし、主イエスは、この到底人間社会が許容する筈のない玉石混合のディナー・パーティーこそ、神が人間に望んでいる本当の姿だと主張されたのです。

現代の状況に翻訳して言えば、主イエスの食卓には、大会社の社長の隣にホームレスの人が、オリンピック・アスリートの隣にエイズ患者が、異性愛者の隣に同性愛者が、キリスト教徒の隣にユダヤ教徒が、ユダヤ教徒の隣にイスラム教徒が座っている光景です。

彼等は共に同じ食卓を囲み、パンを割き、ワインをつぎ合い、愉快地談笑しているのです。主イエスの招きに応えた人々の、開かれた、平等な相互受容の関係がそこにあります。

つまり、主イエスの食卓こそ、神がよしとし給う人間の本当の姿だと言うのです。パウロの「もはやユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。キリスト・イエスにおいて私達は一つである。」という言葉は、まさにこの真実に光を当てています。

日商岩井の社長で、日本銀行の頭取を勤めた速水 優というクリスチャンの実業家がありました。

アルバイトで日商岩井の警備員をしていた青年が、たまたま家の近くにあった教会を訪れた時のことです。案内係の人が丁寧に彼を招き入れ、スリッパを揃え、プログラムを渡し、席に案内し、横に座って讃美歌や聖書を開けるのを手伝ってくれました。

青年はその案内係の顔を見て驚愕しました。何とそれは、新聞やテレビでしか顔を見たことのない、彼の勤め先の社長速水 優さんだったのです。

その青年は後に書いています。『「ああ、そうか」と私は思いました。「これがキリスト教というものか。」』

私達が招かれているのは、あくまでも主イエスを中心にした和解と平等と共有の信仰共同体です。富者が貧者を軽く扱い、強い者が弱い者を組み敷くのが当然とされている世界と対称的な世界がそこにあります。

今日、主イエスのご自身のテーブルに私達を招き給うのです。あなたの隣に跪いているのは、主イエスにおけるあなたの兄弟であり、姉妹です。聖餐式にあずかる私達は、この世の地位や評判や名誉と全く無関係に、神に限りなく愛されている一個の人格的存在です。

主イエスの食卓からほとぼり出る愛があるからこそ、私達は問題と困難に満ちた世界を、本当に人間らしく、正々堂々と生きることができるのです。

その意味で、聖餐式は主イエスの福音のエッセンスと言えます。

今日の聖餐式で、その真実を深く心に刻み付けようではありませんか。その時、私達の心は今という時を人間らしく正々堂々と生きる勇気と喜びに満たされるに違いありません。